

企画名：たらちねβ線核種測定ラボプロジェクト 2018 年度

団体名：認定 NPO 法人いわき放射能市民測定室「たらちね」

## 1. 報告要旨

たらちねの測定事業は 2011 年の原発事故による被曝の恐怖という暴走列車に追われるようにしてスタートした。母親たちが、子どもを守るという目的を実感し、気持ちを強く持ち、そこに多くの人々の力が集まり、現在に至る。β線核種の存在は、測定技術の困難さから、その存在が認識されずにきた。それは福島原発事故だけでなく、それ以前の核被害の現場でも同様である。このことを可視化し、自分たちの身に何が起きているのか、これから何が起きようとしているのかを科学的に考えていくために測定は必要不可欠である。同時に測ることは心を救うことにもつながる。科学という手法から被曝の検証と心の問題の両面を支えることが、たらちねラボの活動である。不安から逃げるのではなく、追求することが怯えを払拭することにつながる。「何のために測るのか」を自覚し、日々、動いている。

2018 年度は、たらちねラボにとって大きな方向転換の年であった。これまで、ラボのスタッフは一般の母親たちで、科学的知識が乏しいという理由から、専門家の指示通りの手作業をするにとどまっていた。それが、自分たちが不思議や謎を見つけ問題の解決に向かって階段を1段ずつ進む活動に変化していった。

精神的にも技術的にも困難な道であるが、それを少しずつ進めていくことは、本当の意味で専門家との連携もできることとなる。また、それは市民が自立した判断をするための市民科学を行うことでもあり、社会の中の問題を自らの力で見極めることにつながる。

福島原発事故災害の収束は、まだまだ見通しが立たない。

膨大な量の高濃度汚染水、回収できないデブリの行方、高濃度汚染地域の立入り解除による放射能汚染の拡大など、私たちの時代では解決できない問題が大きく横たわっている。先のことを考えても解決するという気持ちにはなれないが、私たちにできることをできるところまでやるしかなく、それを次世代に伝達することができるように尽くしていきたいと思う。

## 2. 成果物

1. 測定実施：β線 147 件、γ線 1466 件（2018.4～2019.3）
2. 海洋調査実施：第 10 回（2018.4）、第 11 回（2018.7）、第 12 回（2018.10）
3. 冊子「たらちねストロンチウム 90 測定の巻」本誌+別冊詳細版
4. 黄匯傑「東京観察／我們為福島能做點什麼呢？」『Think Hong Kong』（2019.2.20）  
<https://www.thinkhk.com/article/2019-02/20/33080.html>
5. 共同通信「Memories of Fukushima crisis rapidly fading, warn civic groups」（2018.2.16）『Japan Today』『Iran Daily』『Atomic Age』ほか掲載
6. Bobbie van der List 「[Meet the Japanese Moms Running a Citizens' Lab to Track Nuclear Radiation](#)」『Vice』（2019.3.12）
7. Bobbie van der List 「[In Fukushima zijn burgers nog steeds bang voor straling in hun voedsel](#)」『Trouw』（2019.3.11）
8. Misao Redwolf 「[原発事故から 7 年 — 福島巡礼『いわき放射能市民測定室たらちね』](#)」『NO NUKES PRESS web Vol.008』（2018/8.28）
9. Misao Redwolf 「[原発事故から 7 年 — 福島巡礼『いわき放射能市民測定室たらちね』](#)」『NO NUKES PRESS web Vol.012』（2018.12.27）